

## 平成 28 年度中学校武道授業（なぎなた）指導法研究事業

小倉研究者による実践例報告の様子



平成 29 年 1 月 28 日～29 日の 2 日間、日本武道館（東京都千代田区）において平成 28 年度中学校武道授業（なぎなた）指導法研究事業〔主催＝（公財）日本武道館・（公財）全日本なぎなた連盟・日本武道協議会、後援＝スポーツ庁〕が開催された。

### ■1 日目（1 月 28 日）

開講式の主催者挨拶では島瀬美佐子全日本なぎなた連盟専務理事と三藤芳生日本武道館理事・事務局長が挨拶に立ち、次のように述べた。



島瀬：「今日、明日と 2 日間、日本武道館様のご配慮・ご支援により指導法研究事業が開催されます。研究者の方には今までの経験を活かし、なぎなた普及についての有意義な話し

合いをして頂きたいと考えています。よりよい指導法を検討するうえで皆様からの忌憚のない意見が出ることを期待します」

三藤：「中学校武道必修化が実施され、5 年が経過し、折り返しの時期を迎えました。これからはいよいよ内容の充実が求められるようになります。現在、日本武道館では今後改訂される学習指導要領に武道 9 種目の並列明記を目指し、取り組んでいるところです。また、

日本武道協議会では設立 40 周年記念事業として本年 5 月に指導書と DVD の刊行を予定しております。全国 1 万余校の中学校並びに都道府県教育委員会、また、全国武道指導者研修会の参加者等へ無償配布する予定です。この研究事業で、指導書・DVD の内容充実を含め、なぎなたの素晴らしさを伝えられるよう、十分検討いただきたいと思います」



続いて、安井みどり全日本なぎなた連盟国際委員長が研究者を代表して「過去 3 回参加させていただき、少しずつですが進歩していると感じています。目に見えて成果が上がっているわけではありませんがこの事業の当初の目的である楽しく出来るなぎなたは何か、学校体育におけるなぎなた授業の実施のためには何が必要か、2 日間の検討協議の中で新しい発見が出来るよう努力していきたいと思います」と意気込みを述べた。

開講式後、2 名の研修者が中学校武道授業実践例発表を行った。徳地昌代（東京都立南多摩中等教育学校・東京）研究者から「リズム

なぎなたは創作ダンス単元とは異なるもの。なぎなたというものを理解していない生徒が多く、基本的な動きであってもアドバイスするケースが多くなってしまった。今後はなぎなた部を活用し、生徒同士でコミュニケーションが取れるよう配慮していきたいと思う。また、カウントが取りづらい曲だったので動きにバラつきが多く、選曲を悔やんだ。来年は動きが一致しやすい曲を選択し、生徒が楽しめる授業を実施したいと思う」とリズムなぎなたでの選曲の重要性を紹介した。

続く、小倉尚美（晃華学園中学校高等学校・東京）研究者の報告では「中学生は身長差があり、低い生徒は130cm台、高い生徒は160cm以上あり、なぎなたの取り扱いについて個人差が生じる。受けの指導に入ると課題が表れ、1対多数での指導が困難な状態にある。言葉かけも重要だが、視覚教材の活用や手本を示し、効率よく授業できるようにしたい」と経験の浅い教諭が授業を行う上で生徒の視覚に呼びかけることの有効性について述べた。

その後、日本武道協会で刊行予定の指導書に掲載する指導案の確認作業が行われた。10時間という時間的制約の中でなぎなたの「何を伝えることができるか」、「何を伝えなければならないか」について検討が進み、まずは、なぎなたというものを知ってもらうことが重要であり、指導案には手の内のことなど詳細な動作については記載せず、なぎなたに触れ、楽しんでもらえるような工夫をしていくということで共通理解を図った。その上で指導案の抜本的な見直しに時間を費やした。

## ■2日目（1月29日）

小道場に場所を移し、午前中は昨日に引き続き、指導書掲載内容の検討を行った。学習指導要領に沿った学習内容かつ、なぎなたを楽しんでもらえる方法について研究者自身の経験からよりよい指導内容を指導案に反映させることに注力した。

午後からは渡邊美穂（日出町立日出中学校・大分）研究者がなぎなたを授業で導入するた

めの考察を次のように述べた。「人材面では、中学校における保健体育科教員でなぎなた授業に携わる人は、柔道や剣道と比較すると極端に少ない。これは大学の講義でなぎなたの受講経験者が少ないことが原因と考えられます。予算や施設が整った環境にいたとしても指導法のわからないなぎなたを選択し、実施するまでには至りません。武道授業を担当することになると講義で経験した柔道や剣道を選択しているのが現状です。また、環境面では教育委員会がなぎなたを実施することに難色を示すことが多いと聞きます。これについては学習指導要領に『なぎなた』と記載がないことが採択されない要因になっていると思います。学校、家庭、地域に理解してもらうとともに、今後はなぎなた指導者の育成に継続して取り組み、指導が出来る人材を教育現場に送り込む必要があると考えます」

次に平成29年度の研究事業について検討協議が行われた。その中でなぎなた授業実施校視察が議題にあがり、今後、全日本なぎなた連盟内で日程・開催地等調整した後、日本武道館と視察に向けた準備に入る予定である。

また、徳地研究者から毎年11月に開催している全国なぎなた指導者研修会について「より多くの未経験者が参加できる環境を整えるためには、連盟内で何が出来るかを検討していく必要がある。課題が見えてきたことで進むべき方向が再確認できた」と発言があった。

今回は大幅に予定を変更することとなったが充実した内容で2日間の日程を終えた。

最後に小倉研究者から2日間の研究事業の感想を伺うことが出来た。「今回で3回目になりますが、この研究事業に参加させていただき、いろいろアドバイスをもらい工夫できるようになってきたと思います。しかし、成功しているかどうか問われると未だわかりません。これから生徒たちがなぎなたを通じ成長していくことで、やってきたことの成果・結果として見えてくるものだと思います。長い目で生徒達の今後の成長を見守りたいと思います」